

報告概要

出産の施設化、医療化の進展にともない、様々な医療テクノロジーが導入され、産科医療も大きな変化を遂げてきた。なかでも超音波画像診断の導入は、医療上の診断技術の向上という側面だけではなく、妊婦の身体感覚や胎児の認知のあり方、さらには胎児画像が商品化されることで消費対象となるなど、文化的側面においても、人びと（社会）に大きな影響をもたらしてきた。しかし、超音波診断画像に映し出された胎児の画像を眺め、胎児をみて「かわいい」といった評価や愛着を抱くのは「自然な」「自明」のことだろうか。というのも、モノクロの陰影から成る胎児画像を一見して、直ちに画像の内容を理解し、画像内の胎児に対して肯定的な感情を抱くことのほうが不自然だと思われるからだ。

そこで今回の報告では、2005年～2007年にかけて、実際に妊婦と医療専門家との相互行為をビデオ撮影したデータをもとに、胎児画像をみて妊婦が「かわいい」という感情を抱くことは自明なことなのか、それはどのようなプロセスを経てこうした感情経験に至るのかを会話分析の手法を援用しながら考察してみたい。

既出報告

2006年10月日本社会学会大会・自由報告「生殖医療現場における医療専門家と妊婦との相互行為—妊婦が抱く胎児への感情について—」

2007年11月「視覚テクノロジーと身体：超音波診断装置と妊婦の身体感覚の変容」日本社会学会、関東学院大学